



月次祭 12月19日（金）午前10時～
婦人会例会 12月9日（火）午前10時～

←「一筋」 今年の秋は本当に短い。
10月末まで25°Cを超すような夏日が続いたことから、本当に過ごしやすい秋の期間が短くなつたと思います。

秋の空らしい、晴天の日に空を行くジェット機の音に気がついて仰ぎ見ると、遙か上空を西から東へ飛んでいく機体が一筋の飛行機雲を残して飛んでいました。思わずスマートフォンで撮影。残された飛行機雲も風の影響を受けて、瞬く間にかき消されていく。何もなかったかのように。

もしかすると、一所懸命に何かに集中して只一筋に求めているときは、振り返ることがないので、この飛行機雲のように後には何も残っていないように見えるのかもしれない。

しかし、一所懸命に求めたことは、天の神様の帳面にはしっかり記載されている。必要なときに必要に応じてご守護として返してください。そんなことを感じた、秋の空でした。

今日の
おやのことば

「ちゃんと朝は起きる」
内々ちゃんと朝は起きる、
日々頼もしい／＼。それから
理を出せばどんな理も出る。



おさしづ 明治20年

「早く起きなさい！」「もう少し……」「早くしないと遅刻するよ」
毎朝、わが家で繰り返される会話です。特に月曜日や休日の翌日などは、いつも以上に動きの鈍い子供たちに対して、妻の口調も強くなりがちです。

朝、心地よく目が覚めて、「おはよう！」と元気にあいさつを交わすことが、充実した一日を過ごすために大切なことは分かっています。でも、時計の針は決して待ってはくれません。刻々と時を刻む時計の針に追い立てられるように、思わず大きな声を出してしまうこともしばしばです。

「内々ちゃんと朝は起きる、日々頼もしい／＼。
それから理を出せばどんな理も出る」

とはいえ、起こされる側の気持ちも分かります。

中学生のころは、毎朝、布団をはがされていました。高校時代、学生寮の起床の音楽に使われていた曲は、いまでもあまり好きになれません。

それに、子供たちには、いつも自分の意思で行動する意欲を持ち、何事にも自主的に取り組んでもらいたい。起こされるのではなく、自分の意思で起きる喜びを感じてほしいものです。そう考えて、今朝は優しい口調で声をかけたのですが、なかなか足音が聞こえてこないようです。やはり、少しは大きな声を出さないといけないでしょうか。（岡）

おさしづ原文 明治二十年 上川孫兵衛四十四才身上願

さあ／＼いかなる事情尋ねる。尋ねるから聞かそ。大抵の理は聞いて居る。難しい事は言わん。一つの道を見よか、一つの道運ばか、この理を受け取りある。

内々ちゃんと朝は起きる、日々頼もしい／＼。それから理を出せばどんな理も出る。

睦まじいは誠、天の理である。この順序伝え、皆同んなし理や。

けれども、一人々々分けて聞かさにや、これでは／＼案じあるで。そこで一名々々のさし
づ、誠の心さいあれば、自由自在。誠より外に理は無い。

この理を治め。生涯と定め。未だ／＼未だの心治めは誠である。



朝起き・正直・はたらき。これは信仰する中でも基本中の基本の教理で、こどもおぢばがえりに参加したことのある人なら必ず聞いたことのある言葉。

明治時代はまだまだ、夜は暗かったから夜遅くまで起きていることは希であったと思います。時間を有効にと考えると朝日が昇り明るくなることはとても貴重な時間を生み出していることでしょう。毎朝、明るくなったら起きてはたらくことが、いかに大切なことかと言うことなのですが、現在社会では、夜遅くなっても街は明るく部屋の明かりも明るいので、夜更けまで起きている人もいれば、夜も様々な仕事をされている人もいます。

その方にとっての朝とは、仕事を終えて帰宅して睡眠を取って次に起きたときが朝起きとなると思います。決められた時間は現代社会では、人によってちがってくるのかもしれません。

これもまた変わりつつあり、少し前までは 24 時間営業していたチェーン店が、深夜帯を閉めるようになったり、鉄道の保守作業は夜間行われることが多かったのが昼の時間に運行を停止して行われるようになるなど、生活の環境は年々変化しています。

一人一人それぞれの生活のリズムがあることを踏まえて神様は見て指図される。

その中で、正直な誠の心が何よりも大切。どんなときでもこころを治めて穏やかに気を静めて暮らすことが、幸せに繋がると思います。〔会長〕

教祖伝逸話編 111.朝、起こされるのと

教祖が、飯降よしゑにお聞かせ下されたお話に、

「朝起き、正直、働き。朝、起こされるのと、人を起こすのとでは、大きく徳、不徳に分かれるで。蔭でよく働き、人を褒めるは正直。聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。もう少し、もう少しと、働いた上に働くのは、欲ではなく、真実の働きやで。」と。



少年会の歌

朝起き 正直 はたらきの
三つの教え 身につけて
教祖（をや）のひながた ふみながら
道の子みんな 手を取りあって
共に歩こう 足並そろえ
空の向うに 明日がある
いざひのきしん さあ行こう



会長のつぶやき・・・

うちの教会の朝つとめは、6時に固定しています。タづとめも6時。この時間を決めたのは、私なのですが約40年前、前会長が倒れて私が代務として教会業務を始めるにあたって、朝夕のおつとめの時間は決まっていなかったように思います。まあ、何も知らない中でしたから石川の会長さんに聞いたりしながら時間を決めることが大切だと思い、当時の仕事に出社する時間から逆算して朝の6時となり、同じ時間の方がわかりやすいことからタづとめも6時と決めたのです。

この6時という時間ですが、決めて何年かつとめているとあることに気がつきました。春分秋分の日前後の日の出日の入りの時間がおよそ6時だと。知らず知らずに平均的な日の出日の入り時間としていたのです。

今朝の大坂の日の出は6時30分、日の入りは17時。

だんだんまだ暗い時間につとめをすることになります。

この朝6時に固定した生活ルズムは、旅先であっても変わることなくだいたい5時半くらいには目が覚めることが多いから、習慣というのはすごいことですね。旅先だと、ふらりと一人カメラを持って朝の散歩。朝早くから活動されている方の多いことに驚くことがありますし、昼間の街とはちがう街の表情も新鮮です。

ラジオ体操の歌

作詞：脇太一、作曲：大中恩、
歌：藤山一郎、コロムビア合唱団

新しい朝が来た 希望の朝だ
喜びに胸を開け 大空あおげ
ラジオの声に 健(すこ)やかな胸を
この香る風に 開けよ それ 一 二 三

新しい朝のもと 輝く緑
さわやかに手足伸ばせ 土踏みしめよ
ラジオとともに 健やかな手足
この広い土に伸ばせよ それ 一 二 三



140th Anniversary of OYASAMA "Special Exhibition"

した特別展示「おやさま」を開催します。

現在、教祖百四十年祭を目指して、全国各地で年祭活動がつとめられています。この旬に、教祖ゆかりの品などを中心とした特別展示「おやさま」を開催します。

内容 教祖ゆかりの品、写真パネルの展示など

開催期日

令和7年：11月22日(土)・23日(祝)・24日(月)・25日(火)・

26日(水)・29日(土)・30日(日)、12月6日(土)・7日(日)・

13日(土)・14日(日)・20日(土)・21日(日)・25日(木)・

26日(金) ※毎月26日は午後1時より開催

令和8年：1月24日(土)・25日(日)・26日(月)・27日(火)

※1月26日は午後2時30分から4時30分までの開催となります

時間 午前10時より午後3時まで

場所 南右第2棟

日程が限られています、是非この機会にお立ちがえりしてこころの支えにしてください。

ようぼく一斉活動日を終えて

11月1日に、全5回のようぼく一斉活動日の全日程が終了しました。

私が担当しました錦分教会会場には、今回34名の参加がありました。

今回開催する側としては、いろいろな制約がありその中の会場設定や案内となり十分な対応が出来なかつたのかと腑を噛む思いです。

ただ、第5回錦会場に参加された方には、受講後のお楽しみ行事として福引きを行い用意した景品を何か持って帰っていただけたので喜んでいただけたのではないかと思います。

各会場で様々な趣向を凝らし、これから年祭までの3ヶ月勇んで暮らし、陽気遊山でおぢばにかえって参拝していただける種を蒔いたと思います。

・ · ·

ようぼくとは、別席場で同じ話を九回聴くとおさづけの理は戴けるのだが、席に座っていればいいのであって、居眠りしようがずれ落ちようが、そんなの関係ない。

「今貰うて直ぐとほかす者でも渡さにやならん」とは神様仰せです。真実誠、通つておるかが大事なのです。

月々の席、もう一箇月済んだと思えど、心に理が治まらねば何にもならん。何ぼ席々と言えど、心の理によってこうのうが無い。席をして順序運べば、さづけは渡そう。なれども落す日もあるやろ。これ知れん。幼年なる者に理が渡したる処もある。日々諭し合い、尋ね合い。心の理、心の席という。さあ心次第でさづけという。

【明治二十二年十一月二十五日】



印が渡したら、些の処心を違わす事が出来んで。身の授け置くから、失わんよう、落さんよう。神が取り返さん。あしきはらいたすけたまゑ天理王命、三遍ずつ三三九度。

【明治二十年十月十一日（陰暦八月二十五日）八時頃】

貰うたとてじいと納してある者もある。貰わん先心の理に合つて一つの理がある。これは生涯の楽しみの理もある。世界諭して心の理もある。たゞさづけだけ貰うた、これでよいという者もある。分からん者さづけ、世界十分通る処の理によつて、一夜の間にも授ける者もある。三年五年貰いたいと信心の者もある。うつとしい難しい者もある。心の宝を求めて居て、世上の理を通る。これは不思じやな。何時渡すやら知れん。

【明治二十三年一月十三日 夜】

さづけ／＼の処、よう聞き分け。日々の席をする。席をすればさづけは渡す。その時の心、受け取る時の心、後々の心の理がある。日々まあ一日の日、結構という理を忘れて了う。どうも残念でならん。なれど運ばねばならん。そんならその者にはやろう、この者にはやらんというような隔ては無い。今貰うて直ぐとほかす者でも渡さにやならん。

【明治二十三年七月七日 午前三時】

『稿本天理教教祖伝逸話篇』七九 帰つて来る子供

教祖が、ある時、喜多治郎吉に、

「多く寄り来る、帰つて来る子供のその中に、荷作りして車に積んで持つて行くような者もあるで。又、風呂敷包みにして背負つて行く人もあるで。又、破れ風呂敷に一杯入れて提げて行く人もある。うちへかえるまでには、何んにもなくなつてしまふ輩もあるで。」と、お聞かせ下された。

親神様、おやさまに喜んでいただけるこころの修練を欠かさず、自分の出来る人助けを一所懸命に推し進める。これが真実。